「おさしづ」語句の探求（23）

第２巻の「本部事情」の「おさしづ」と「道」

おやさと研究所講師
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

今回は、『おさしづ改修版』第２巻における「本部事情」に「おさしづ」に見られる「道」を整理する。第２巻には「本部事情」の「おさしづ」は95件あり、そのうち「道」が見られるのは28件、１件に３回以上用いられるのは10件である。ここでは、「道」の用例に注目するため、３回以上「道」が用いられている10件の「おさしづ」を取りあげる。

前回、前々回に取りあげた、「刻限」や「本席身上伺」の「おさしづ」では、「神の道」と「世界の道」が対比して用いて、歩むべき方向性や心の置き所について諭されることが多かった。それは、端的には、教会本部としての歩みの進め方に対するものであるが、今回取りあげる「本部事情」の「おさしづ」では、そうした「道」の用例は見当たらない。ここでは、「世界」と「神」の対比よりも、「古き道」や「これまでの道」ということが多く出てくる。以下に、その用例を挙げたい。

これまでの道を見よ

「本部事情」の「おさしづ」における「道」では、「世界の道」と「神の道」という対比はなくて、それとは異なった対比において、教会本部の歩みに対する心構えが説かれている。それは、「今」と「これまで」という対比である。

> 「もう〳〵頼もしい道が見えてある。なれど、めん〳〵心よりする事はどうもならん。今の道を見て居りゃ、うまいものと思うやろ。取次何人、なか〳〵の道である。長らく通りた道筋、いつ〳〵までも皆残る。……これまでの処、難儀苦労の道を通り来た。よう聞き分け。……だん〳〵に土台を入れて固めてある。なれど、あちらが弛み、こちらが弛みする。」（明治24年２月８日　教祖五年祭御願の後にて引き続きおさしづ）

ここでは、「今の道」について、「うまいものと思うやろ」と当時の本教の状況について言われる。実際、教祖１年祭は途中で警官に止められ、満足に勤めることができなかったことに比べると、５年祭には10数名の警官の護衛のもと、10数万の人が集まって勤められたと伝えられる（『改訂天理教事典』）。それほど、この「道」は、盛大になっていたわけであるが、「これまでの処、難儀苦労の道を通り来た。よう聞き分け。」と言われ、それは「土台を入れて固めて」きたようなものであり、土台が弛むということのないように、と諭されている。

また、次の「おさしづ」では、「古き道を尋ねよ」と言われる。

> 「これまで道を通し、どんな中も連れて通りた。……これまでの処にて古き道を尋ねてみよ。つゞまる初まり尋ねてみよ。あら〳〵分かる。……何程通してやろうと思えど、神一条の道を忘れては、山坂ころっと落ちにゃならん。……知らず〳〵の道、分からず〳〵の道、みす〳〵の道ある。これ三つ出掛けたらどうもならん。盛ん程めん〳〵心を静めて掛かるから盛んという。心の理があれば勝手の道という。勝手の道は盛んとは言えようまい。暗がりの道が見えてあるから、諭さにゃならん。」（明治24年７月24日　昨夜のおさしづに基づきさんげの処、本部員一同の願）

このように、「古き道」とは、つまるところ、神が付けて、これまで神が連れて通ってきたという「道」である。それは「神一条の道」とも表現されている。今では本教は「盛ん」になっているが、これまでの「古き道」を忘れていては、「暗がりの道」が見えてくると戒められている。その他にも、「この道というは、すうきり紋型も無き処から追々の道。」（明治24年８月４日）、「何でもない処から始まりた道を思やんせよ。」（明治25年７月27日）などと、「この道」というは、紋型もないところから始まって、神の守護により、難しいなかもだんだんと通り抜けて、開けてきたのである。盛大になってきた今の教会の歩みを進めるにも、「これまでの道を見よ。……元々一つ理がある。その学びさえすれば同じ事」（明治25年12月６日）と、常に「これまでの道」の歩みに照らして考えるように諭されている。

古き道夜々刻限事情、諭したる

「本部事情」の「おさしづ」では、「世界の道」と「神の道」が対比して説かれていないが、「世界の道」に関連して「道」が繰り返し用いて説かれる「おさしづ」が１件だけある。それは以下のものである。

> 「又事情これより始める、始まる。どうでも一時話通り、よく〳〵事情、古き道夜々刻限事情、だん〳〵事情諭したる。……立て合いの理、世界一時の道、事情ある。立て合い世界始まり掛けたる道、順序の道、事情第一順序は世界、誠一つ、天の理、これ思やん。これ諭し置く。……出て来る事情ある。表の道独り立って来る。」（明治25年12月20日　天理教会一派独立の件に付伺）

ここでは、「世界一時の道」「世界始まり掛けたる道」「表の道」として、教会のあり方を説かれていることは、伺いの内容からも明らかである。それに対して、「古き道夜々刻限」においてだんだんと諭してあると言われる。それは、これまでに取りあげてきた「世界の道」と「神の道」による諭しをさしている。思案すべき順序については「表の道独り立って来る」という言葉が示唆するように、第一には「神の道」をしっかりと歩むべきことを示されていると読むことができる。

「本部事情」の「おさしづ」においては、「道」を用いた「おさしづ」は、「刻限」や「本席身上伺」と比べると少ない。特に、「炊事場普請」などのような具体的で分かりやすい願いや伺いに「道」は用いられていない。一方、「天理教会一派独立」というような本教の方向性に大きく関わる問題については、「道」を多用して心の置き所を諭されている。

前回、「本席身上伺」における「道」について、「世界の道」と「神の道」、「今」と「これまで」という二つの対比によって整理した。「本部事情」においては、前者の対比は表面的には見られないが、一派独立の伺いにおいて「刻限」で「諭したる」と言われるように、「本部事情」においても、「刻限」や「本席身上伺」と一貫した「道」の対比を見ることができる。